

「平成の出雲暦」それとも「出雲の歴史民俗手帳」。島根県の出来事や地域行事などを幅広く載せている「島根県民手帳」に比べて異色のライバルと出ている。冬に書店に並ぶ手帳たちは容赦なくまた一つ歳を重ねることを教えてくれる。

出雲手帳は同様の内容で卓上用と携行用の2種類ある。ともに編纂された方々の神々の国・出雲への深く熱い想いが伝わってくる。確かに出雲手帳は暦である。かつて祖父母たちは農事や家の諸々の祭事を営む際、決まって暦を手にしたことを覚えている。暦には天体の運行から始まり、農作や生活に必要な情報が蓄積されている。

明治期の「Statistics」の訳語論争において「統計」を強く推したのは森鷗外である。鷗外がいなかったら、もう一つの訳語候補だった「移智契」(少しずつ多

導き出すという意味)となっていたかも知れない。一つ一つの事象を集め、永遠の法則を導き出すという意味で、暦もまた「移智契」ということができるだろう。

△今岡 清雄▽

「出雲手帳」発刊に寄せて 祭事や伝統文化 語り継ぐ材料に

さで出雲手帳には二十

1シを充てて紹介されている神事や地域の祭りは、出雲人の営みの集大成であり、あらためてその数の多さに驚く。また5月10日からの出雲大社の大遷宮に関わる祭事が詳しく紹介されている。

ところで島根県は75歳以上の老人が6人に1人いる県であり、それは同時に「語り部」の多さでもある。諸事困難な時代であって、激動の時代を生き抜いてこられた「島根の稱田阿礼」にできるだけ多くのことを語り伝えてもらいたいと思う。

テレビがなかったころ、掘り炬燵で祖父母に暦の見方を教わり、暦の不思議さに惹かれた記憶がある。スマホが君臨する時代は、皮肉にも若者の孤化が進む社会でもある。出雲手帳を介して、おじっつぁんやおばと孫たちが出雲のことを語り合う、そんな光景があたりで見られたらいいと思う。

この手帳には語り部と未来の担い手との仲立ち、縁になってもらいたいと願う。

(島根県政策企画局統計調査課長)

平野の詳しい農事暦やこの地で詠まれた俳句や和歌が載せられていたらありがたい。

(出雲手帳製作委員会編集、NPO法人出雲学研究所発売、卓上用2500円、携行用1260円)

